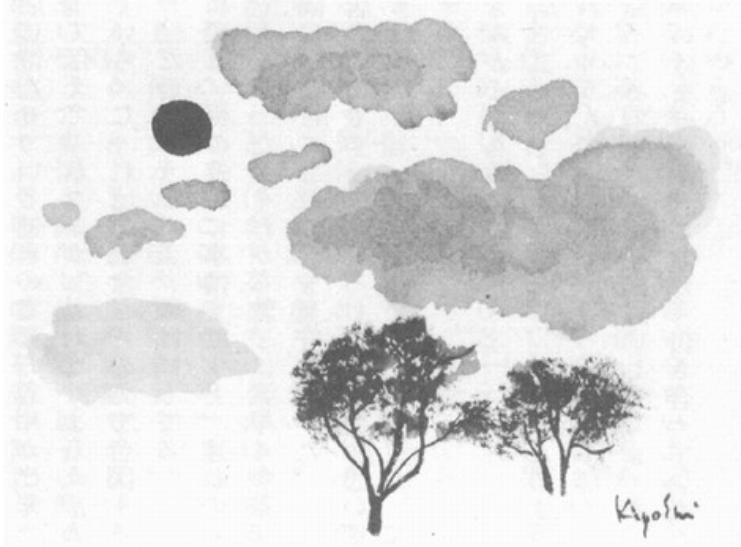


母の墓

香取 淳



平坦な国道の両側は出揃ったばかりの稲穂がどこまでも途切れることなく続いている。なだらかに裾野をひく山が夕陽を受けて悠然と聳え立っていた。その中腹から峰にかけて傾斜が急になり、幾筋かの山壁が黒々としている。

「あれは浅間山じゃないかな」

北見は助手席の妻に声を掛けた。妻の幸子は膝に広げた道路マップを丹念に見ながら答える。

「旧中仙道を西に向かっていているから、そうね、浅間山だね」

その山肌も麓から次第に暗くなり、峰に近い尾根だけが残照を受けて暗い炭火のように光っている。窓外はすっかり色を失い、稜線と空がやつと見分けられるほどになった。そして麓の所々に蛍が群がるかのように町明かりがきらめいている。電池の明かりを頼りに執拗にマップに赤鉛筆を走らせていた幸子が顔を上げずに言った。

「和田峠を越えなくても蓼科に出られる道があるわよ」

「それは、ちゃんとした道なのかね」

「大門街道だいもんって書いてあるし、そんなに悪い道ではないと思うわ」

その提案に同意した北見は、街道の入口までのおおよその距離を妻に尋ねた。外はもう完璧な闇で、ヘッドライトに照らしだされる灰色の道と両脇の黒い樹木以外は何も見えない。計器板の小窓に休むことなく刻まれる白い文字からすると、そろそろ分岐点にさしかかる筈である。しかし、中々それらしい道は現れない。このまま和田峠を越えても大して大回りにはならないな……と北見が諦めかけたとき、前方に大きく青色の標識が浮き上がった。そこに白樺湖と蓼科の白抜き文字を認めた彼はウィンカーを左に上げる。スピードを緩めずにハンドルを切ると、タイヤが鋭く鳴った。

「お父さん！」

妻とリアシートの子供達が同時に大きな声をあげた。

「急だったからな、でも無理はしていないよ」

北見は正面を見たまま平然と言った。

「私がやると随分乱暴だっけ言うのに、自分では平気なんだから」

妻の不平を聞き流しながら、ほぼ一定の速度で坂を登って行く。道は少し狭くなり、黒い塊となった樹林もますます深さを増してきた。二、三丁先を行くバンのヘッドライトが林間に見え隠れして、道の屈曲を予告している。対向車も殆どなく、あってもヘッドライトでそれが早めに判るので、北見は道路の中央線を遠慮なく越えて走っていた。

「こんな所でさあ、もしも車が故障したら困るよね」

ずっと黙っていた中学一年になる奈緒美なおみが心細い声で言った。

「スカイラインはね、絶対に故障なんかしないから」

二歳年下の裕ひろしの生意気な言葉に奈緒美が反発して、静かだった車内が騒々しくなった。口だけだった二人のいさかいはエスカレートして、手も出始める。仕舞いに助手席の幸子が振り向き、華奢きゃしゃな身体からは信じられないほどの大声を出して二人を諫めた。

再びFMラジオの音楽とエンジン音だけの単調な世界に戻った。一段と急な坂を越えると、林は途切れ平坦な草原に散策コースの案内や保養施設の看板が立ち並んでいる。

その平坦な道の突き当たりはまた黒い木立で、車が浮き上がるような登りである。さらに急カーブを左にハンドルを切ると、そこから先は下り坂になった。下方に見える建物の明かりに樹木の幹がシルエットを織りなしている。そして、その根元に精悍な獣が立っていた。ヘッドライトと周囲の明かりが程よく溶け合った夜の林に、スチール写真の主のような佇まいである。尖った耳がピンと立ち、目が緑に光っている。対向車線の中程で、こちらを見上げて立つそれは全く動こうとはしない。神社の狛犬こまいぬに似た風情で、北見の車が通り過ぎるのを待っていた。

——流石に野性だ。人間に飼い慣らされ、本性を失った動物とは違う。

北見が感嘆の面持ちで脇を通り過ぎようとしたその瞬間、その動物がヘッドライトに飛び込んで来た。あつ、と思

うのとシャーシーの底にコツンと小さな音を感じたのは同時だった。ブレーキを踏む余裕は全くない。そのまま坂を下りながら、誰に言うでもなく北見が言った。

「狐だったね」

「ええ、狐でした」

幸子がやはり呆然として答える。

「狐、死ななかった」

奈緒美が後ろから泣きだしそうな声で訊いた。

「うん、背中が微かに当たっただけだから死にはしないよ」

北見は答えながら、生まれて初めて生きた動物を轆ひいたことに、恐怖に似た感情を覚えた。

車は、墨を流したように黒い湖の畔を走っている。幹が仄かに浮き上がる白樺林の中にホテルやペンションが立ち並び、その薄明かりの中に幾組かの男女が手を繋いだり、身体を寄せ合って歩いている。暗い湖面には対岸のホテルの窓明かりが揺らめいた。そして、また人気のない林道に入っていく。

「狐、かわいそう。本当に死ななかつた」

再び奈緒美が悲しげな声をだす。

「タイヤで轢いてはいないから、多分失神しただけで済む
と思うよ、ねえ母さん」

「そうね、後ろの車も轢かないで避けていたようだから」

「お母さん、本当に見たの」

「ええ、確かに見たわよ」

「僕はかなりの衝撃を感じたよ」

それまで黙っていた裕も口を挟んでくる。北見は車を止めて引き返そうかと思つた。

——しかし、引き返したところで何が出来る、自分には何の手当てもしてやれないし、たとえ車で運んだとしても夜に診察してくれる獣医も見つからないだろう。それに、相手は野性の獣だ、もし助かるほど元氣なら危険ではないか、旅先で手などを噛まれたらどうする……。

北見は、しきりに狐の安否を気づかう娘の言葉に打ちのめされていた。

——あの時は登りの急カーブを越えたばかりで、スピードは幾らも出ていなかった。何と言ってもブレーキを踏む余裕も無かつたではないか。

彼は忌まわしい出来事が不可避であつたことを頭の中で反芻し、^{はんすう}惨めな自分を励まし続けた。やがて車は黒い樹林を抜け出して、草原や田畑の間を緩やかに下っていく。遙か先の地の底に、横一筋に広がる町明かりが見えてきた。

旅行前に幸子が苦心して予約したビジネスホテルは簡単には見つからない。何度か駅の周囲を行き来して、やっと背の低いビルの屋上に看板を見つけた。路地に入ったものの、今度はホテルの入口が分からずに、また駅前に戻ってしまう。それほどに混みいつたビルの狭間にある小さな古いホテルであつた。駐車場は一杯だったので、ホテルの狭い玄関に頭を突つ込むように車を停めた。路地にはみ出しているトランクを開け、旅行バッグや飲み物を詰め込んだクーラーを手に玄関に入る。フロントでツインルームの

鍵を二つ渡され、エレベーターで五階に上がる。玄関やフロントも薄汚れていたが、室内も同じであった。四人が最初に入ったそれは角部屋で、壁は菱形に歪み、二つのベッドの収まり具合がひどく悪かった。その部屋は夫婦が使い、隣に子供たちが寝ることになった。幸子がバッグを開けて荷物を二つに分ける。最初不安気だった子供たちはリュックサックやパジャマを手は何度か隣室に出入りするうちに元気になり、二人だけで過ごす夜にむしろ興奮気味である。その子供たちを連れ、北見は外に出た。駅の周辺を歩き来して、ホテルの向かいの小料理屋の暖簾のれんをくぐる。それぞれに好みの料理を注文し、北見は生ビールのジョッキを傾けながら名物の蜂の子を取った。土地の人はスガリと呼ぶ蜂の薄黄色の幼虫や柔らかい蜂の形に成長しているそれを箸先で一つずつつまみながら妻や子供にも勧める。妻と裕は恐る恐る箸をつけたが、奈緒美は顔をしかめて食べようとはしない。

小鉢の蜂の子は少し水っぽくて、味は期待したほどでは

なかった。彼が子供の頃に食べたそれは、フライパンでこんがり炒り、醤油味で仕上げた。たつぷりと脂が乗っていて、歯触りも良かった。山国の信州では蛋白源が乏しくて、北見も子供の頃にはイナゴや沢蟹さわがに、川虫から蛇に至るまで大抵の生き物を食べた。それらの中で、夏から秋にかけて乾いた地面に逆ピラミッド型の巣を造るスガリは彼らにとって格別の御馳走であった。そんな昔話を披露しながら北見は上機嫌でビールを何杯も飲んだ。

北見は妻子と共に墓前に生花と線香を捧げて合掌した。頭を深く垂れ、重ね合わせた掌に力を込めて父母や祖先に語り掛ける。

——私は毎日、とても健康で幸せに暮らしています。社会的にも相応の地位に恵まれ、子供たちも健やかに育っています。どうぞこれからも変わることなく私たちをお護り下さい……。

北見が祈りを込めて一層深く頭を垂れたその時、あーッ

という鋭い悲鳴を聞いた。目を開けると大きな石塔がぐらりと傾き、隣の幸子と奈緒美の頭上に落ちようとしている。幸子は娘をだき抱え逃げようとする。北見も倒れかけた石碑の下に飛び込み、助けようとする。だが石碑の方が一瞬早かった。逃げ遅れた二人の上に重い墓石がのしかかる。

妻の背中を直撃した四角い石はグラリと横に傾き、奈緒美の脚を地に押しつけた。妻は蒼白の顔を地面につけたまま声もない。奈緒美は痛い痛いと大声で泣き叫ぶ。北見は渾身の力を込めて墓石を起こしにかかった。だが、黒光りする石はびくりともしない。何度か試みた北見は起こすことを諦め、うろたえている裕を促して一人で墓石を横に押す。ほんの少しだけ横にずれると、奈緒美が自由になった。石の動きで上向きになった幸子の白い顔半分は土で黒く汚れている。痛さに泣く娘に声を掛けてやる余裕もなく、彼は墓石を更に押す。裕も必死だ。やっと妻の身体から墓石が離れ、北見が抱き上げる。血の気を失った幸子に裕も泣き叫びながらすがりつく。奈緒美も動かない片足を引きずり

ながらにじり寄って来て声をあげて泣いた。しかし幾ら時が経っても幸子は二度と目を覚ますことはなかった。北見の両親の墓前で息を引き取った妻。その亡骸なきがらに娘と息子がすがりつき、彼らはそこを動くことが出来ない。

目覚めた北見の目に涙が溢れ、頬を伝わっている。隣のベッドでは、妻が静かな寝息をたてていた。彼は起き上がり、妻の額や頬をそっと撫でてみる。眼を覚ました幸子がどうしたの、と怪訝けげんな面持ちで聞く。

「変な夢を見た。お前が死んじゃうんだよ。夢とは思えないほどリアルで怖かった」

北見は臆病な子供のように妻のベッドにもぐり込む。幸子は夫の手を取って自分のふくよかな胸の上に置いて言った。

「貴方きつと疲れているのよ。私は絶対に死なないから安心して」

幸子は幼子をあやすかのように手を伸ばし、彼の髪を暫

く撫でていた。

——墓参に来たその前夜に、何故こんな夢を見るのだろうか？ もしかして父母の霊が何かシグナルでも送ってきているのか。馬鹿な！ 今どきそんなことがあつてたまるものか。

眠気はすっかり消え去り、星をちりばめた夜空のように澄んだ頭で彼は自問する。幸子は乱れた毛布を夫の肩に掛け直す。そして上向きになると手を伸ばして夫の手をそと握った。幸子の規則ただしい寝息が暗い部屋に響き始めた。その寝息の一呼吸ごとに彼女の細い指先から力が抜けていく。

北見は三歳の時、母と死別しているが、その母は東北の阿武隈川の河口にある小さな村に生まれた。生家はさほど貧しくはなかったものの彼女の母、北見にとつては祖母に当たる人が田舎にじつとしてはいられないタイプの女であつたらしい。祖母は何かと口実をつくつては東京に出て、

好きなことをしていたようだ。世間によくあるように、彼女はお人好しの世話好きで、人手が要る話を聞くと、都会に憧れる若い男女を一人、二人と郷里から連れて行く。そんなことを繰り返すうちに、本格的に就職を斡旋するようになった祖母のその仕事は、製糸産業で活況を呈していた信州にまでおよび、貧しい家の娘を何人も岡谷やその周辺の町に送り込むようになった。あの野麦峠を越えてきた飛騨の娘たちが名高いが、東北からも若い娘達が集まつてきたのである。

近隣の娘たちをかき集めては汽車に乗せ、工場に送り込む仕事は必ずしも評判は良くなかった。当時は製糸工場に限ったことではないものの、労働条件は極めて悪く、夜明けから暗くなるまで長時間の仕事が続いた。さらに手先の器用な女工は良い糸を取れるものの、そうでない女の取った糸は等級外れになることが多かった。そんな女の取った糸は売り物にならず、仕入れた繭まゆを殆ど台無しにしてしまう。当然その女工の給金や待遇は悪くなり、周囲の風当た

りがきつくなる。

余りにも仕事の辛さに耐え切れず、工場の寄宿舎から逃げ帰る娘や、中には不治の病であった結核に胸を侵されて、死を寸前にして送り返される娘もあった。そのような不幸な娘がでる度に北見の祖母はその娘の家族から恨まれることになる。周囲には気をつかわない人だったが、それでも世間体を気にした祖母は、次女であった北見の母が十五歳になると、彼女を他家の娘と一緒にこの地に連れてきた。北見家の親戚に製糸工場を経営する事業家がいて、母は最初その工場で働いた。

北見には詳しいことを知る術もなかったが、母はとびきりすぐれた糸取りだったという。しかし常日頃女工を確保してくれる女の娘であったから、しばらくして彼女は製糸工場から経営者の家の奥女中に廻された。それと相前後して北見家の最初の妻が急死した。乳飲み子を抱えてうろたえる実家の弟を見るに見かねた女主人は、奥女中の彼女を北見家に派遣した。若い男やもめと若い娘が一つ屋根の下

で暮らしていれば成り行きは決まっている。弟の意思を確かめた女主人の口利きで、ささやかな祝言が執り行われ、彼女は北見家の後妻におさまった。

故郷を旅立った幼い日に、母は男勝りの祖母から強く言い含められていた。

「信州の製糸工場に行ったら辛い事が多いと思うわよ。でもね、どんなに辛いことや苦しいことがあっても弱音を吐いちや駄目、あなたは私の娘なんだから。誰からも後ろ指をさされるようなことは絶対にしちや駄目よ」

その言葉を一昼夜にも及ぶ長い汽車旅で何度も言い聞かされ、その度に素直に頷きながらこの地にやって来た。そして、慣れない土地で精一杯働き、そこから北見家に嫁ぐ日にも、母は女主人に祖母と同じ忍耐の言葉を繰り返し言い含められた。

その母にとつて、嫁いだ家の二人の遺児は夫と同じか、それ以上に重い存在であった。間もなく生まれてくる自身自身の子供とは身分が違う、そう思い込んでいた母にとつ

て遺児達を我が子と分け隔てなく育むことは難しいことであつた。

当時の基幹産業であつた製糸業に明け暮れる山深い谷にも容赦なく戦争は押し寄せてきた。村役場で戸籍係をしていた北見の父は、上から次々と出される命令に従い、徴兵令状を各戸に送りつけ、その兵士の出征の日には駅のプラットフォームで軍国旗を携えて見送りの列の先頭に立つた。

母の最初の子が十四歳になつた。彼は優秀で成績はクラスで常に一番であつたから、小学校の教師は中学への進学を熱心に勧めた。在郷軍人として村のリーダー役であつた父も同意したが、母は頑として首を縦に振らない。

「私が預かつた先の奥様の子は中学にやらなかつたのに、どうして私の子だけを上にやることができますか。そんなことをしたら私は世間に顔向けができません」

日頃は何一つ口ごたえもせず、おとなしいだけの彼女の頑な態度に夫も子も引き下がる他はなかつた。そしてその子、北見の長兄は傷ついた心のまま、一五歳になると九州

の人吉にある海軍航空隊に飛び込んで行つた。

母は腹を殆ど休めることなく次々と子供を生んだ。『産めよ増やせよ』の時代であつたからどの家でも大差は無かつたが、北見は八番目で異母兄弟と合わせると十番目になる。

北見が三歳になつたばかりの春まだ浅い日、母は下部部のひどい痛みを覚えた。その疼く痛みはひどくなる一方で、床に伏した彼女はうめき声をあげて苦しんだ。まだ医者はごく一部の金持ちしかかかれぬ時代で、仮に医師が往診したところで薬もない時代である。容赦なく襲ってくる痛みと高熱に喘ぐ母の額に氷嚢ひょうのうを当てる。が、氷はすぐに融けてしまう。裏の池に張つた部厚い氷を年上の兄がツルハシで砕き、その妹が母の寝ている奥座敷に運んだ。父は病気に効くという草木を煎じ、粥かゆを炊たいてあてがつた。その父や兄弟姉妹の懸命の介護も甲斐なく、母は日に日に衰弱していく。腹だけが異様に膨らみ、蒼白に痩せこけた母は子供たちが寝静まつた夜更けに先妻の遺児、北見家の長女を枕元に呼び寄せた。彼女はもう二十歳を過ぎ、幼い弟

妹の面倒を母に代わってみていた。その血のつながりのない娘を前に母は衰弱した身体を無理やり布団に起こした。寝巻の裾をようやくかき合わせ布団に正座する。腕白盛りの弟妹や病人の世話に疲れ果てていた長女は養母のただならぬ気配に気押されて、それまでの眠気が一気に吹き飛んだ。何事が起こるのかと恐怖に似た気持ちで身を固くしている娘に向かって母は神か仏を拝むかのように、胸の前で両手を合わせた。

「今日まであなたには辛い思いばかりさせてしまったけど、どうかこの私を許して。あなたにこんなことを頼める資格はないんだけど、幼い子供たちのことをお願いします。どうかあの子達を一人前になるまで育てて下さい。このとおりです」

「お母さん、そんなこと止めて。私もお母さんに育てられて一人前になったのよ。手なんか合合わせられちゃたまんないわよ。それより、しっかり休んで、早くよくなって」

しかし、母は布団で合掌しながらもう動くことはできな

かった。その母の二つの手を解きほぐし布団に横たえる。血の気を失った母の呼吸がだんだん荒くなり、そして徐々に弱くなっていく。

「お父さん、早く来て。お母さんが、お母さんが！」

その鋭い悲鳴で父が、そして年長の兄弟姉妹が目覚まし、枕元に集まってきた。幾ら声をかけても目を覚まさない妻の頬を父は何度も叩いた。しかし衰弱して深く落ち窪んだ目はもう開かない。次第に父の手に力が入って音がするほど強くなった。しかし冷たくなっていく母は二度と目を開けることはなかった。

母の死後、何年かして北見家は長男の嫁にシズを迎え入れたが、それまでのあいだ北見はこの姉に育てられた。その異腹の姉は義母を決して良く言うことはなかった。小さい頃からひどく他人行儀で、躰しづけが厳しかった。北見たち兄弟には優しくかったのに、自分には何時も冷たくて、切ない思いのし通しだったと。

頭の中を母に纏まとわる悪い話が駆けめぐる。北見は眠ろう

と寝返りをうった。腕が砂壁に触れて、こぼれた砂が手首にまとわりつく。そのザラザラした感触が心の底まで伝わってくるようで、今夜は当分眠れそうにない。

北見はいま歳を取り、兄や姉たちの言い分がそれなりに分かるようになってきた。しかし幼い時にはそんな分別は無かった。親戚や知人が家に来るたびに声高に驚いて言う。

「葬式の時はいまあんなに小さかった子がこんなに大きくなって！」

その都度幼い北見は彼らに向かって『俺が生きていて珍しいか、悪いのか』と毒づきたい衝動に駆られた。そしてもう少し歳を取って多感な、何にも増して母の無いことを辛く感じる時期には、母への中傷や悪口に救いようもなく傷つき、離れの小部屋に籠もって泣いた。

母の死は仕方がないとして、せめて彼の記憶の中にだけは母が生きていて欲しい。そうすれば周囲の誰が何を言おうと『自分には掛け替えの無い母だった』と胸を張って生きていけると思った。

しかし、彼には全く母の顔も姿も残ってはいなかった。

北見の母の死後、二度と再婚はすまい、そして異腹の兄弟姉妹を分け隔てなく育てようと決意をした父は、二人の妻の写真をアルバムから全部はぎ取って焼き捨てていた。従って北見は母の姿を写真でさえ見たことはなかった。

北見には遠い幼い日に、すぐ側を着物姿の女が去って行く後ろ姿のイメージが仄かに残っている。彼の眼の高さがその女の大腿位で腰から上は見えないから、それはきつと母の死ぬ間際の姿だと思ふ。そのせいか、北見は闇に消えて行く女を見かけると訳もなく心を惹かれた。大学生になつてからも夜道でそんな場面に出くわすと、それまで歩いていた方角を忘れた。特に白い服の女には強烈な力で引きつけられた。夜目にも鮮やかにくびれた腰と丸い尻を追って彼はどこまでもついて行く。そして女が視界からフツと消え去る瞬間に、胸を搔きむしられるような切なさや悦びの入り交じった感情を何度も味わった。

娘と息子に揺り起こされて、北見は目が覚めた。妻も子も服を着て、荷物も全部隣のベッドに載っていた。黒い大きなバックだけが開いていて、彼の身の回りの品を催促していた。北見は気だるい体を無理やり起こしトイレに入る。吐く息が酒臭く、顔が少し浮腫むくんでいる。この朝の己の醜さに遇うたびにもう深夜の酒はやめようと思う。何度そう思ったことがあるか数えたこともないが、何時の頃からか夜更けに寝つかれないと酒を飲む癖がついた。昨夜も部屋を出て自動販売機でカップ酒を二本手に入れた。晩酌でたらふく飲んだビールの酔いが醒めかけたとき、また飲む酒は彼をすぐ眠らせるが、目覚めるまで酔いが醒めない。何時もそうである。こんなことを続けていたら肝臓を壊してしまうと思うが中々止められない。冷水で何度も頬を叩くようにして顔を洗う。外では狭い部屋から早く出たい子供たちが騒々しい。

ホテルに入った時と同じ荷物を抱え、彼らは車のトランクにそれらを積み込む。昨夜玄関に止めた車は、駐車場に

移されていて、他の車は一台もない。北見は運転席で首を伸ばし、バックミラーに顔を写してみた。眼の周りが少し赤い。隣で幸子が心配そうに彼の顔を覗き込んでいる。その妻に大丈夫だ、と声を掛けてシートベルトを締める。彼はアクセルを踏み、諏訪湖に向かった。北見はこの町の高校を出ているので、地理には詳しい。要領よく細い路地を通り抜け、湖畔に出ると近くの広場に車を停める。数年前にこの湖畔に間欠泉が湧いたという。東北に住んでいる北見は鬼首おにこうべのそれは何度か見たことがある。山間の小さな峡谷に石で囲まれた泉口が二つあって、それぞれに弁天、雲竜と名が付けられている。入場料を払って柵から降りてきた観光客が遠巻きに見守るうちに地響きがして拭き上げが始まる。十数メートルの細い湯柱は互いにその高さを競うかのようにしばらく噴き続ける。やがて湯柱はへなへなと勢いを失い、湯滴を周囲にまき散らして地の底に吸い込まれる。最初に見た時は、これが有名な間欠泉かと自然の偉業に舌を巻いた。遠来の客が訪ねて来る度に何度かそこに

足を運んだが、案内をする度に湯柱の丈が低くなってくるように思えてならない。盛んに噴いている時でさえ、天辺は脇の土手に茂る竹よりも高くはならなかった。恐らくあの噴き上げより少しは高いのだろうと高を括りながら湖畔を歩いた。先方に大きな石を小高く積み上げ、隙間をコンクリートで固めた泉口が見えてきた。その周囲には鉄平石が平方に敷き詰められている。更に木の柵で囲まれた泉口の正面には湖を背に大きな立て札が建てられ、何やら書いてある。

「東洋一の間欠泉だって！ 観光地は何事も誇張されていて嫌だね」

誰に言うともなく悪たれを吐きながらそこを離れた北見は湖岸の堤防に立ち、煙草に火をつける。薄緑に濁った水は昔より一段と汚染が進んでいて、溝川とががわが流れ込む先は幾重にも油が浮いている。

子供達の歓声と“ゴー”という音に振り向くと小高い泉口が白い湯煙を噴き始めた。たちまち勢いのある湯柱が龍

のごとく空に駆け登り、その頂上は高層の観光ホテルよりも高くなった。湯柱も太くて周囲の誰もが思わず何歩か後ずさりした。のんびりと青空を旋回していた二羽の鳶とびも街中の方角に位置を変えた。この高い湯柱では風下に湯泉の雨が降りそそぎ、鉄や金属は全部錆上がってしまうに違いない。朝夕に一時間だけバルブを開けて観光客にサービスをするのだという案内に北見は納得がいった。存分に噴き上げた湯柱はやがて収まり、周囲にゆで卵に似た臭いを漂わせている。度肝を抜かれた一家はお互いに顔を見合せ、ため息混じりで車に戻った。再び北見はハンドルを握り、湖畔の道を走り始める。山間の狭い谷底の大半を湖が占拠しているので、平地は殆ど残されていない。その僅かな平地に家が途切れることなく立ち並んでいる。下諏訪町と岡谷市の境を示す標識を過ぎて間もなく、北見は国道を外れて湖畔道路に入って行った。波立つ湖水の先に鋼鉄の水門が平たく伸びている。その手前の広場に車を停めて、水門に向かう。水門の裏側に廻ると、濁った水が泡を噴きなが

ら溢れ出している。鈍色の鉄板をくぐり抜けて、天竜川となる流れを見ていると北見は背筋が寒くなる。子供の頃から何度か此処に来たことがあるが、その度に不気味な何かを感じてきた。北見はきつとそれは膨大な湖水をせき止めている水門が持つ魔力のようなものに違いないと考えてきた。しかし此処にまつわる悲しい話を北見は最近本で知った。かつて製糸産業が隆盛を極めた頃、この辺りはその中心で湖畔には数えきれないほどの煙突が立ち並んでいたという。そして全国から何万人もの糸取りの女工達が集まってきた。器用で要領のいい女は他人が羨むほどの高給を手にしたが、そうでない女が大半を占めていた。親に前金が支払われ、身売り同然で働きに来た女が仕事の辛さに耐えられずに逃亡を企てて失敗した女、行きずりの情事で児を孕み途方に暮れる女、そして結核に侵されて血を吐く女。それらの生きる術や望みを失った女達が次々と湖に身を沈め、この水門の近くに水膨れの死体がしょっちゅう上がったという。北見は泡立つ水面を見詰めながら、もしかした

らその薄幸の女たちの怨念が今でもこの辺りに漂っているのかも知れないと思った。

「奈緒美は、『ああ野麦峠』という話を知っているかな？」
「そのお話はね、先生から聞いたことがあるよ。とっても悲惨なのよね」

北見の問いに娘はくつたなく答える。

「この岡谷はね、昔イタリヤのリヨンと肩を並べる生糸の町だったんだ。最盛期には諏訪湖の周辺に千本もの煙突が立っていたんだって。そして絹糸をとる女工さんが全国から集まって来たんだね」

「どうしてこんな山奥に工場が一杯建ったのかしら」と幸子が会話に入ってきた。

「とてもいい機械を改良して、何処よりも優れた生糸を造ったらしい。この地方の人達は研究熱心で、努力家だからね。戦後は生糸が駄目になると、いち早く時計やカメラなどの精密工業に切り替えている。まあ、穿^{うが}った見方をすれば土地が少なくて貧しいから農業だけでは食ってはいかれ

ないんだな」

北見は擬木のベンチに腰を掛け、湖面を渡ってくる風に煙草の煙をくゆらせた。その煙を避けるように隣の妻と娘は腰を上げて広場で遊ぶ裕の方に歩いて行く。

水門の下流に架かった橋を渡り、車を対岸に進める。この辺りは右手の山が湖岸まで迫り、景色は二十数年前と殆ど変わっていない。北見は高校時代に諏訪湖一周のマラソンやクラス対抗の駅伝で何度もこの道を走ったことがある。スタート地点から十キロはあるこの辺に來ると、前後を走る仲間の姿も少なく、頬をなぶる風が快かった。その頃の石ころ道と違つて舗装された道を車は音もなく進んで行く。

北見が懐かしい記憶を辿るうちに振り出し地点の上諏訪に戻つて來た。彼は湖を取り巻く道から外れ、山沿いの道を真っ直ぐ進む。視界が大きく開けた。狭い谷の中ではこの辺りが最も広い平地になっている。その見渡す限りの水田の中を車はひたすら疾走する。前方の山裾にこんもりと

した森と、平たい瓦屋根が見えてきた。ゆったりとしたスペースの駐車場に車を停め、立ち並ぶ土産物屋の間を通り抜けて神殿に向かう。山を背にした神殿は余り大きくはないが、杉の古木に取り囲まれて荘嚴な構えである。神殿の左手には回廊があつて、中に入ると真昼とは到底思えないほど暗かつた。空気も何百年も前からその場に漂つているかのように湿つていて回廊を歩く足音も全部吸い取られてしまうほど静かである。

この諏訪大社には上社と下社があつて、上社には前宮と本宮、下社には春宮と秋宮がある。そして、全国に二万以上の末社があるという。

「此処は本宮、だよね」

玉砂利を踏みながら北見は妻に確かめる。

「ええ、本宮だと思えますよ」

観光案内書を手にした幸子が答える。

「武田信玄は此処を護り神にしていたんだけど川中島の合戦に行くときには、どの社殿に参拝したんだろう！」

「私は此処じゃないかと思うわ、凄く重みがあるもの」

「そうかな、でも何の根拠もないよね」

「ええ、そう言われればそうだけど。ねえ、今度来るまでに調べてみましょうよ」

並んで歩く二人の先に奈緒美が先回りしていて、カメラのファインダーを覗いている。幸子が北見の腕に軽く手を絡ませて、二人は杉の古木の下でポーズをとった。

この地方には六年に一度、御柱祭おんばしらと呼ばれる奇祭があつて、この神社の四隅に柱を立てる。八ヶ岳の中腹から切りだした大木に綱をつけて山を曳き、谷を落とし川で清め神殿に運ぶ。威勢のいい木やりの声に合わせて夥しい人が綱を引き、どんな時でも命知らずの若者達が巨木の上に乗って氣勢を上げる。滑り落ちたり振り落とされて怪我人が続出する。柱の頭にメドテコという二本の角に似た木の楔くさびを打ち、左右に綱を張って丸太の回転を防いでいるものの力加減が狂うと柱は回転し、その下敷きになれば命が危ない。必ず何人もの死傷者がでるその祭りで北見は此処に来たこ

とがある。十二歳の時が見納めだったが、その時も神社の隅に立てかけた柱の一本が途中で倒れて、天辺に乗っていた若者が下敷きになって死んだと言う。むろん彼は現場をみた訳ではなかったが、その時は夥しい人の群れを遠巻きにするばかりで神殿には近づけなかった。

時計は一時を過ぎていた。昼に生家に行くことを電話で約束している北見は心持ちアクセルを深く踏む。途中で車を止め、幸子と奈緒美が生花を買いに熱いアスファルトの道を歩いて行く。その後ろ姿を見送りながら北見は裕に漫画を取り出させ、シートの背もたれを一杯に倒した。女の買物物は長いからハンドルを握ったまま待つのは苛立つ。彼は幾ら待たされてもいい体勢で思いきり伸びをした。連日の運転で目が疲れているのか、漫画の大きな文字もちらちらと読みにくい。

そこから数分で北見の生家に着いた。国道から細い路地に入り、四、五軒先の突き当たりである。その戸口に小太りの女が立っている。今年六十五になる兄嫁のシズであつ

た。彼女はどれくらい前からそこに立っていたのか定かではない。が、石のように立ち尽くすその姿は、彼女がそこにいた時の長さを物語っていた。敷き詰めた砂利に靴の踵を埋めながら、一家が次々に降りるときもシズは不動のままである。北見が車のドアをロックし、遅くなったと声を掛けたとき初めて彼女は表情を少し動かした。そして鈍い仕種で彼らを家に迎え入れた。幸子が紙袋に一杯詰め込んだ土産の菓子や海産物を手渡し、シズの手を引くようにして台所のテーブルの上に置く。北見と子供達は居間の古びたソファーに腰を掛ける。家の中は散らかり、客を迎える準備は何一つ出来ていない。招かれざる客だったかな、と北見は一瞬後ろめたい気分に見られた。

昨年の盆にも北見は一家で墓参りに来たが、その時は北見の兄がいた。午後の二時頃に着くと客間の大きな卓袱台ちやぶだいに御馳走を一杯並べて、さあ飲めさあ食えと盛んに勧められる。ところが料理は喉を通らない。兄は守衛の仕事で恐らく留守だろう、そして兄嫁は気が触れているから……と

昼食を済ませて此処にきた苦い経験がある。そこで今度は、昼食を摂らずにやってきた。が、また裏目に出た。その表情を読み取ってか、一時してシズは昼御飯まだだね、と重い腰を上げる。台所にしばらく立った彼女はエポナイトの赤い椀わんに白いソーメンを盛り、盆に載せてきた。眼の前に出された粗末なその椀を、北見は怪訝な目で眺める。妻も子供達も同じ顔である。台所に再び立ったシズは細長い皿に締めサバを形なりに切り刻んで盛りつけてきた。そのシズに促され北見は椀を手を持った。箸で一口食べてみる。ソーメンに醤油汁だけの、料理とは言いがたい代物である。父親に真似て北見の子供達も恐る恐る食べ始めた。北見は締めサバを口にしてみたが生温くて馴染めない。シズは台所から厚く切った熟れたトマトを皿に盛って運んでくる。生野菜が無難かと、箸を伸ばしてみたが、これもまた冷えてはいない。しかし北見は苦痛を顔には出さず、目の前だけは綺麗に食べ終えた。

「電話をしたのにお兄さんには私たちが来ることを話して

ないのね」

妻が口を尖らせ北見の耳元で囁く。

「恐らくね、その辺がまともではないんだから、大目に見てやらなくちゃ」

少し不満顔の幸子は台所に立ち、シズと共に後片付けをしている。古びたテレビには甲子園の高校野球が放映されていた。そのコントラストの悪い画面を北見は子供達とぼんやり眺めていた。

彼が幼かった頃、終戦直後の物不足に加え片親で子沢山の北見家は困窮を極めた。母の死後二、三年してシズが嫁に来るまでは、年長の姉が母親代わりを務めたが、その姉もすぐに嫁いで、それ以後はシズが母親代わりとなって家事を切り盛りした。やがて兄弟姉妹は年の順に高校を出て上京し、家族の人数が年々減ってゆく。嫁にきて初めてやらされた農作業と小姑の世話に、シズは喘ぐような日々を送った。そしてシズ自身は子宝に恵まれなかったから、北

見が大学に進むと広い家は年取った姑と長男夫婦だけになる。その姑も北見が大学を卒業した春に脳卒中で倒れ、そのまま息をひきとった。

その北見の父の死を境にシズが精神が変調を来した。

もともとシズは表情が乏しくて、黙り込んでいることが多かったが、時折爆発しては鬱憤を北見にぶつけた。

「朝から晩まで真つ黒になって働いても一銭の得にもなりやしない。苦勞して高校まで出してやつても卒業すれば、皆知らん顔で好きなことばかり……。どうして私がある達の面倒をみなけりやならないの」

何か事あるごとに辛く当たられる北見は、その度に身の置場もなく、死ぬほど悲しい思いをさせられた。そして十七歳の秋には家出を決意して、都内で細々と商売をしている二番目の兄の家を訪ねたこともあった。

シズは北見が高校を卒業するのと相前後して外に働きた。もともと商家の出であったから、最初はスーパーマーケットのパートから始めたが、何度か職場を変わるうち

に重症心身障害者施設で働くことになった。正直で素朴な身障者が可愛くてやり甲斐のある仕事だと話すのを大学生の頃、帰省した北見は何度か聞かされたことがある。その仕事にのめり込んでゆくシズにとっては、打算や駆け引きのない障害児との世界の方が現実の社会より魅力があったのかも知れない。そして北見の父の死が契機となって、いよいよ日常生活が立ち行かなくなった彼女は精神病院で治療を受けた。一旦は病状が好転し退院したものの、何度か入退院を繰り返していた。今はスーパーマーケットのレジ係が勤まる程に回復したと兄は言うが、離れた土地で暮らしている北見達には定かではなかった。

ソファーで憂鬱な思いに落ち込んでいる北見の肩を幸子がトントンと叩いた。

「ねえ、早くお墓参りに行きましょう」

北見もこの重苦しい部屋から一時も早く外に出たかった。借りたヤカンに水を汲み、準備してきた線香や生花を揃えて玄関を出る。再び車で国道に出て、二、三丁先を八ヶ岳

方向へ向かう小道に入って行く。JR中央線の線路の下を潜り抜け、急坂の手前にある広がりには車を停める。この坂を登り切れば、八ヶ岳ペンションビレッジに行くことが出来る。その道路の脇に段々に重なる草地は、かつては北見家の水田であった。他にもかなりの田畑があったが、兄は父の死後相続税を支払うために売り、次は家を新築する資金に、そして僅かに残った田畑はかえって生活の邪魔になるとすべて売り尽くした。その夏草に覆われた平地に小さなプレハブの事務所が立っている。誰の持ち物か北見は知る由もないが、かつて水田であった頃、父は田植えが済むと稚鯉ちごいを放した。稲が穂を結び、頭を垂れてくる頃になると、北見は年の近い兄たちと田に入り、大きく育った鯉を捕まえた。自分の手よりずっと大きい鯉だったから幼い頃は物凄く大きく感じたが、年と共に小さくなっていく。最初は鯉の成長が年々悪くなっているように思ったが、それはむしろ北見の手が次第に大きくなっていく結果ではなかったかと思う。稲刈りの時、乾いてひび割れた田に鯉の

死骸をみつけると、しまったと思う。一匹も残らずに捕まえて、池に移してやったつもりでも毎年必ず二、三匹は取り残しがあつて、その都度可哀相なことをしたと幼い彼は思ったものである。

一行は線香や生花などをそれぞれが持ちプレハブとは逆方向の落葉松林に入つて行く。暑い日差しが葉で遮られ、蟬時雨しぐれが快い。郷里に來た折は必ずこの墓地に立ち寄るが、入口の緑の落葉松林は何時でも気持ちのいい場所である。その林を抜けると視界が開け、畑や果樹園が続いている。そこを右手に折れて果樹園に添った小径を登ると先祖の墓がある。

人一人しか歩けない狭い坂を北見は先頭に立つて登った。その通路にまで枝を伸ばしている洋ナシが葉と同じ色の瓢箪型ひょうたんの実を幾つも結んでいる。その果樹園の隅を四角に切り取った位置に墓地がある。奈緒美のサマーキャンプの都合で一家は帰省の予定を二日早めていた。従つてどの家の墓にもまだ盆の花はなく、掃除を終えたばかりの黒土が

石塔の周囲に湿っていた。北見は昨夜の夢が正夢になることを恐れた。北見は墓に近づくと、妻や子供たちを手で制して墓地の中央の小径に立ち止まった。他家の墓地を二つ通り越えた先に父母が眠っている。小径から墓石の側面が見えるが、それは随分前に傾いていた。小さな地震でもグラツと前に倒れそう。

「これはひどい！」

思わず小声で叫んだ北見は、妻子に注意するよう声を掛けながら墓地の黒土を踏む。正面に來ると墓石の傾きは分からなくなり不安が少し薄れた。しかし注意して墓石から離れた位置で線香に火をつけ、生花や水を添えた。石塔の左手の土はほんの少しまだ膨らんでいる。二十年前に急逝した北見の父の墓である。その時彼は新入社員しんにゅうしんいんの教育を受けていて、病状に合わせて何度か東京と郷里を行き來した。脳出血から五日後に父は無言のまま息を引き取った。野辺の送りの前に遠くから駆けつけた親戚に最期の別れと土葬の棺桶を小さく開けた。北見たちも一緒に見たその死に顔

は、綺麗に剃った髭も少し伸びていて、あたかも気持ち良
く眠っているかのようにであった。その土饅頭にも花と線香
を立て、脇の墓碑に目を移す。北見は、家紋の入った台石
に建てられた御影石には『先祖代々の墓』と刻まれている
ものと思っていた。が、数個の文字の末尾が『大姉』で終
わっている。彼が長い間先祖代々の墓と思いつ込んでいたそ
れは、北見の母の墓碑であった。子供の頃からこの墓の前
には数えきれぬほど何度も立っている。従って字が読める
ようになって改めて墓碑を見ようともしなかった。そこ
には大抵がそうであるように先祖代々の墓と刻まれている
ものと思いつ込んでいた。しかし四十を過ぎたいま、初めて
彼はその墓碑が母のものを知ったのである。そしてすぐに、
家を継いだ腹違いの兄が何故その墓を大事にしないのか、
その訳も思い知らされた。妻の幸子は線香や生花を少し残
してこれは新しいお墓にお供えしましょう、と娘に声を掛
けている。

その妻に「そんなことはしなくていい」、と言いかけた北

見はその言葉を喉の奥に呑み込んだ。妻子達の動作に合わ
せ彼も立ち上がる。一旦そこを出て、小径を登り二、三段
上の墓地に再び入っていく。今度は新しい墓碑にはつきり
と北見家代々の墓と書かれている。そして側面には建てた
年月と長兄の名が刻まれていた。父の死後まもなくして此
処に墓を移したらしいが、北見達兄弟には何の相談も無か
った。更に代々の曹洞宗も改宗して、古い仏壇や見慣れた
位牌も消え去っていた。したがって北見の立っている墓地
や目の前の石碑は、彼には無縁のものであった。「いや、待
てよ」と彼は線香を立てながら昔のことを思い浮かべた。
かつて此処には草が茂り、角に丸い石が一つ置かれていた。
盆には刈り取られた草の切り株と丸石の間に線香を立てた
ものである。それは山口市で死んだという、北見の叔父の
墓であった。

北見はその叔父に会ったことはないものの残された二人
の娘から話を聞いたことがある。姉の方は独身で、新橋駅
の近くで小料理屋をやっていて、大工の夫と結婚している

妹が時折エプロン姿で店を手伝っていた。北見はアルバイトやコンパの帰りによくその店に立ち寄った。店じまいも近くなり、妹や最後の酔客が帰ると姉は急に酔いが回ってくるのかひどく饒舌になった。そしてよく亡父の思い出を北見に話した。

庭園技師だった彼女の父は東京を振り出しに全国を仕事で行脚した。山口で大きな仕事を受け負っていた最中に彼は脳卒中で倒れたが、幸い病状は軽くて、安静を保てば回復の見込みは十分にあったという。しかし、その絶対安静の時の深夜に借家が見舞われた。彼は病気の我が身を返りみず、家族を外に誘導し、それが済むと煙の渦巻く家の中に飛び込み家財道具を先頭に立って担ぎ出す。火が収まって近くの仮宿で横になった彼は、疲れきって高いびきをかいて眠ったという。しかし彼はその眠りから二度と目を醒ますことはなかった。翌朝妻や娘たちが幾ら揺り動かしても冷たくなった彼はもう目を開けない。その地で茶毘に付された遺骨は消沈した妻にだき抱えられ、郷里の

信州に帰ってきた。彼女の後ろに身を隠すようにして、十歳を過ぎたばかりの姉妹がまとわりついていて、幼い姉妹は相次ぐ不幸と環境の目まぐるしい変化に怯え、初めて会う親類縁者に挨拶をする余裕もなく身を固くしていた。

遺骨は新しい墓地に葬られ、母子たちはしばらくのあいだ北見家に身を寄せていた。叔父の妻は夫の四十九日が済むと、姉妹を連れて郷里に引き上げ、しばらくして再婚した。が、姉妹にとつて母の新しい夫は、何時までたっても見知らぬ人に過ぎなかった。彼女らの父は男らしく勇敢で、己の命を犠牲にしても家族を護ってくれた実父以外にはあり得なかった。姉妹はある日二人だけでそつと家を飛びだし、東京に出たという。

茶碗酒を煽りながら、次第に呂律の回らなくなっていく彼女。その襟は乱れ、太り過ぎの白い胸の谷間にまで汗が光っている。彼女は、家出したとき持ってきた父の形見の墨田公園や雲仙公園の設計図は私の宝物よと、よく北見に自慢した。

しかし今は、その従姉妹たちからの音信は皆無である。したがって兄は新しい墓を遺族に何の断りもなく建てたことになる。そして代々の曹洞宗からも改宗したのであれば供養も無いままに建立された墓である。その墓に線香をあげる気持ちなどさらさらないが、妻子の手前北見は平静を装って儀礼を済ませた。ヤカンの水も全部まき、軽くなつたそれを右手にして小径に戻ってきた。二、三步下つてまた右手を見る。今にも倒れそうな母の墓。

「建て直すことは出来ないのかしら」

悲しげに見つめる彼に幸子が言う。

「俺たちは北見家を出た人間だもの、長男がやろうとしな
いのにどうしてそんな差し出がましいことを」

北見は力なく絶句する。近くの低い梢で鳴いていた蝉が飛び立ち、暑く湿つた空気をかき混ぜるように目の前を過つた。

——死んでしまえば墓なんて当の本人にとつてはどうでもいい。あの名高い藤の木古墳でさえ、今はもう田の畦あぜの

草むした盛土で、誰の墓か分かりはしない。たとえ国を支配するほどの豪の者であつたとしても、長い年月の末には無縁仏になつてしまふ……。

北見は止めていた足を小さく前に踏み出した。かなりの傾斜で足裏に力を込めなくても身体が前に進んでいく。

あの傾いた墓が倒れるなら、それはそれでいい。恐らく母の魂はこの淋しい寒村から遠く離れた生まれ故郷、豊かに流れる阿武隈川の広い河口の地へ飛び還つてに違いない。

真つ青な海に荒波が白く打ち寄せる浜、河口に生い茂る葦や薄緑の藻の間を泳ぎ廻るエビや小魚、そして干潟に集まってくる沢山の鳥たち。母の魂はきつとその豊かな自然に取り囲まれて、もしかしたら幼なじみと泥んこになつて遊び廻っているかもしれない。こんなに貧しい山間の、死んでまで粗末にされる墓の下に何時までも留まっている筈などあり得ない。えい、こんなちっぽけな墓石など早く倒れて雨風に晒され、土や砂に風化してしまえばいいんだ！

そう思いながら北見は小径を下り、少し広い黒土の道に出た。幸子が手にしたマッチの束をもて余し、北見の顔を見上げる。

「何でそんなものまで買ってくるんだよ、幾らなんだってマッチ位はあつただろうに」

彼は妻の手から小箱を一つ取りあげ、取り出した軸木に火を点けた。その火に数本のマッチの頭を近づける。激しい炎を噴いてそれらが燃え盛る。黒土の上で次々と燃えるマッチが無くなると、空箱も炎に投げ込んだ。幸子も途中からその作業に加わり、青白い炎が作裂する度に鼻を強く刺激する煙が立ち込めた。妻の持つ十個の小箱が全部炎に変わって、それも下火になってきた。

「あのね、お義姉さんがね、こんなこと言ったのよ」
火を見つめながら幸子が独り言のように言う。

「貴方を幼いときからとつても苦勞して育てたつて。出来るものなら養育費が欲しいつて」

北見は拾った小枝で燃え差しをつついていたが、妻の言

葉にギクリとして顔を上げた。

「私、もうびっくりして声も出なかった」

北見はその妻をみて、やはり言うべき言葉が思いつかない。ただ、涙が溢れ炎に晒されて熱くなった頬を伝わり落ちた。

「お父さんどうしたの、泣いてるの」

奈緒美の声に我を取り戻した北見は、煙が目に染みただと言いつつ訳をしながら立ち上がる。わずかに残った燃え殻を靴底で何度も踏みつける。そして彼はもう墓参りはこれで終わりだ、もう二度と此処には来たくない、二度と来まい、と強く思った。

北見は無言で坂道を下った。落葉松で覆われた薄暗い道に時折木漏れ日が差しこみ、湿った土の上で銀色の生き物が跳ねるかのように踊った。

——彼女は本当に気が触れているのだろうか？ もしかして狂った振りをしているのではなからうか。よりによって多感な頃に嫌というほど傷つけられた言葉を、今また妻

まで巻き込んで聞かされるとは！

急に無口になった両親を気づかっていたか、子供たちも口をきかない。その沈黙に耐えられなくなった北見は掠れた声で叫んだ。

「なあみんな、これから山に登らないか。お父さんが子供の頃しよつちゆう登った入笠山に登ろうよ」

奈緒美がすぐに賛成した。裕も、うん行こう、と力を込めて言う。そして幸子が、これから皆で山登りよ、と不自然に大きな声を上げた。

車に乗り込んだ一家は国道に出て、家並みの間を南に走った。かつて宿場町であったこの辺りは道沿いに家が建てられ、連なる軒の間に殆ど隙間が無かった。北見が通った小学校の前を過ぎ、なだらかな登り坂にさしかかる。そして家並みが途切れると、左下手に谷川とその畔にある小さな駅が見えてくる。その駅の上は林が大きく切り開かれて、青いスレート屋根が連なる工場に姿を変えている。橋を渡ったあの駅まで、汽車の煙を遠くに見ながら毎朝必死に駆

けて通った高校時代。高校を卒業してから、いろいろな町に住み、沢山の駅を乗降して来た北見にとって、いま前方に見える駅舎は信じられないほどに小さく見えた。彼は脳裏を過る思いを断ち切るかのように鋭くハンドルを右に切る。急なカーブで、しかも急勾配の登りである。快調であったエンジン音が粗くなり、あえなくノッキング。彼は慌ててセカンドにギアを下げて、再びエンジンの勢いを取り戻す。この辺は、昔はひどい石ころ道だったのに随分綺麗になっっている。家並みが途切れ、キャベツやトマト、トウキビなどの野菜に混じり鮮やかに咲くアスター畑の奥まで入っても、まだアスファルトの舗装道路が続いている。気分良くハンドルを握っていた北見だったが、ついに行く手を林に阻まれた。

「なあんだお父さん、道を知ってたんじゃないの」

その子供たちに、道が良すぎるからだ、と言いつつながら畑中をバックする。少し下って、他の小道をまた登った。

今度は塩梅よく何処までも道は続いていた。舗装が途切れて砂利道になると、そこは見覚えのある確かな林道である。彼は無心にアクセルを踏み、グングン登っていく。頂上までたどり着けるか自信は無いものの、駄目だったら引き返せばいい。

窓外の緑が柔らかく優しい色をしている。大人の背丈の二倍ほどに伸びた落葉松林である。

「あれ位になれば放っておいても大丈夫だが、小さい時は手入れが大変なんだ」

北見は誰にという訳でもなく話し出した。

「植林の後、周囲の草を毎年刈り取って育てるんだ。何処の家でも一人出なければいけないからお父さんもやったことがある。そうそう、中学校の行事でも行ったことがある」

曲がりくねった林道の登りが一段ときつくなった。敷き詰められていた砂利も所々水で流されて、地肌が剥き出しになっている。そういえば家を出た日は台風だった。特に高速道路では激しい雨で前方が見えなくて難渋した。幸い

高速を降りる頃には天気は良くなって、豪雨のことはすっかり忘れていた。しかしこの辺りもひどい雨に見舞われたとみえ、林道の路面にはその激しい流水の跡がそのまま残されている。時折シャーシーが砂利に触れて尻の下で不快な音をたてる。

「お父さん、大丈夫？ スカイラインで走る道とは違うんじゃない」

「心配するな、何とかなるから」

そう答えながら北見にも自信は無かった。ただ、妙に興奮して前へ前へとアクセルを踏み続けていた。前方に小さな崖崩れがあり、人の頭位の石が散らばっている。右端にハンドルを切り、路肩ぎりぎりを通り過ぎる。その路肩の下は絶壁で今登ってきた麓の町が手に取るようによく見えた。引き返すにしてもターンする余裕のない道である。少し傾斜が緩んでまた柔らかい緑の林に入って行く。前方からジープが下ってきた。そこは割合道幅があり、停車しな

いですれ違えた。

「この道はやはりジープか四輪駆動だな」

難なく対向車をやり過ごし、ホツとして北見が言う。

「お父さんはこんな道が大好きなのよ。奈緒美や裕がまだ生まれていなかった頃はね、しょっちゅうだったの」

幸子は子供に言い聞かせるように言葉を繋げた。

「やっぱり信州からの帰り道だったわね。軽井沢を越えて足尾銅山の方に入って行ったときは本当に怖かったわ。ひどいオンボロ車で、しかも夜はどんどん更けてくし」

北見は相変わらずアクセルを強く踏み込み砂利を撥ねながら林道を登っていた。視界が広がり、平坦な道に出た。

彼はホツとしてハンドルを強く握っていた手から力を抜いた。カーブの突き当たりにある看板の前で車を止める。そこは武田信玄の隠し金山跡で、その昔抗夫達がここに住み金を掘っていた、と書かれている。北見が子供の頃にはこのような観光案内は一切無かった。この千軒平には秋になると見事な栗茸くりたけが生え、北見は大きな籠を背負ってこの一帯を歩き廻った。一日歩くと、籠一杯の栗茸が採れて、そ

れは塩漬にして冬の間の副食になった。看板の前に立ち昔話を披露した彼は、すぐ運転席に戻った。この辺りの道は広くて傾斜もゆるやかである。道端の草や木のすべてが艶やかで、生き生きとしている。その精彩に満ちた緑の間に、時折黄色や白い花が咲いていた。その形がシヤクナゲに似た小振りの花の密集した花卉の上に数匹の蝶が競うように舞っている。左右の景色に目を奪われてノロノロ運転をしていた北見は車を止めて外に出る。カメラのレンズを近づけても、橙色に黒い紋のある蝶たちは逃げずに優雅な舞を続けていた。

また少し車を進める。樹木の枝から山葡萄やまぶどうの蔓つるが垂れ下がり、目を凝らすと大きな葉の陰に葉と全く同じ色の葡萄の房が幾つも連なっていた。

「このブドウはね、秋になると熟れていい香りがするんだよ。周りの葉が全部散ってしまうと大きな木の枝が青紫の塊になってそれは見事だ」

北見は道端の一房を掌で包み、妻子に自分の持ち物であ

るかのように自慢した。

「お父さん、その頃になったらまた此処に来ようよ」

奈緒美の言葉に頷きながら、また車を進める。赤土に所々小石を散りばめた広い登りに差し掛かる。もう山頂まで幾らもない筈である。その赤茶けた道の中腹が斜めに深くえぐられている。少し窪んだ所を勢いよく雨水が流れたとみえ、洗われた小石が道を横切って転がっていた。左右中央どこを越えても車の腹が手前の膨らみに乗り上げて動けなくなるに違いない。左の下方から斜め上に進んでも乗り越えられそうにない。四人は溝の畔に立ち途方に暮れて議論していた。上から四駆のワゴンが降りてきた。車高のあるそれは躊躇なく目の前の溝を越え、ノンストップで降りて行く。それを恨めしく見送った北見は意を決し、比較的溝が浅い左端に小石を運び始める。妻や裕も手伝って窪みが段々浅くなってきた。林の中に入り込み、平たい石を抱えてきた北見はそれを窪みに載せる。もう大丈夫だ、と意見が合い北見がハンドルを握った。前方で幸子が指図してタ

イヤを踏み外さないように誘導する。三人が口々に大丈夫と叫ぶのを聞いて、彼は一気にアクセルを踏み込んだ。車は腹をこすることもなく軽快に土手乗り越え、そのまま十数メートル坂を登った。その後ろから手を叩きながら三人が追ってきた。上から数人のヘルメットのライダー達がゆっくり降りてきて、何を喜んでいいのか怪訝な顔で傍を通り過ぎて行く。

赤土の道を覆っている灌木の間を抜けると山頂近くで、道はバス道路と合流していた。正面の入笠山に続く急斜面には一面に白い花が咲いている。その下の平坦な舗装道路は駐車場まで真っ直ぐに延びていた。彼らは駐車場に車を止め、先を争うように外に出た。そこにはログハウスの売店とキャンプ場があり、木柵の先は青々とした放牧場になっていた。背丈の余り高くない松や灌木の間に赤茶色の登山道が峰に向かっていく。北見はカメラだけを肩に掛けた軽装でその道を登りはじめた。かなりの急勾配だが、皆軽い足取りで登っていく。左手は冬にはスキー場になるとみ

えロープトウが端に張られていた。その草原に、花が一杯咲いている。それも殆ど全部が白、見渡すかぎり白一色の花畑であった。去年の夏行った霧ヶ峰はニッコウキスゲの黄色と青や紫の花が多かった。美ヶ原は赤やピンクが目についた。しかし此処にはどうした訳か白い花ばかり、形は

大小さまざまだが、どれもみな純白の花ばかりである。割合ゆとりのあつた道が狭くなり、さらに熊笹が両脇から迫り出している。奈緒美はキュロットで、脚を傷つけてしまいかも知れない、と北見は後を気づかかって振り向く。口を

一文字に閉じていた娘が顔を上げ、平気平気と笑顔を返す。背の低い裕は熊笹の葉のなかを泳ぐようにして登ってくる。その熊笹も姿を消し、ゴツゴツした岩と灌木の間の黒土の道。息を詰まらせて休んでいる母子連れがいる。子供はまだ三歳か四歳くらいだ。随分小さな子を連れてくるんだね、と話しながら彼らは歩を早める。頂上が近づき、足下の斜面が次第に丸みを帯びてきた。灌木や草が消え、瓦礫がれきの斜面を一気に駆け上がるとそこは頂上だ。眼下に鏡のように

光っている諏訪湖。そこから流れ出た水は天竜川になって左手に長く細い帯を霞ませていた。右手は八ヶ岳で、青い連峰がすぐ間近に感じられ、豊かな裾野は遙か彼方にまで延びていた。そして諏訪湖の先の薄雲の上には北アルプスの峰々が淡青く連なっている。

「奈緒美、裕、これが父さんの故郷だよ。凄いだろー！」
大声を上げながら北見は近くの大きな岩に駆け登る。その岩の上に仁王立ちになり、両手を思いきり伸ばして澄んだ空気を存分に吸い込んだ。

〈了〉